
普通戦隊 イッパンジャー グリーン編

うわの空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

普通戦隊 イッパンジャー グリーン編

【コード】

N0786U

【作者名】

うわの空

【あらすじ】

一般人から選ばれし者たち、イッパンジャー。今回はグリーン編です。

(前書き)

この作品は、以前投稿した「普通戦隊イッパンジャー ブルー編」の続きです。

なんでこう毎度毎度、嫌なタイミングでやってくるんだらうか。

カップ麺に湯を注ぎ、2分30秒ほど経った頃に鳴ったインターホン。何となく嫌な予感はしていた。押し売りセールスのおばさんだったら嫌だと思いつつ、押し売りセールスのおばさんであることを祈ってドアを開ける。

「よっ！元気にしとったかー！」

足元から聞こえてくる声に落胆する。やはりお前か。やはりお前なのか。

声の主、虎猫は俺の足もとをすり抜けて、さっさと部屋の中へと入っていく。目をあげると、美形で知的だけどネジの外れているブルーと目があった。

「…必殺技、考えたか」

一言目がこれだ。やはりこいつはズレている。そう思いつつも、頷く。

「サンダーアタック、でどうだ」

「ダサいな」

一蹴された。『リア充爆発しろ』が必殺技だと豪語するこいつにダサいと言われた。泣きたい。こいつのセンスと俺のセンス、どっちがおかしいのか誰かに聞きたい。

「なあなあ、カップ麺伸びてまうでー」

部屋の奥から虎猫の声。お前らのせいだと思いつつ、俺はブルーを部屋にあげて扉を閉めた。その時。

「あ…あの…」

外から小さな声が聞こえた。気がした。

「？」

もう一度ドアを開けると、見知らぬ男の子が立っていた。身長は

少し低めで、恐らく高校生。よく言えば温和そうな顔。悪く言えば特徴のない、どこにでもいそうな顔だった。

「えーっと…?」

首をかしげる俺の背後から、虎猫の声が響く。

「あ、影が薄すぎて忘れとった!そいつ、グリーンやねん!」

「おまつ…!酷すぎだろそれ!」

「だって」

虎猫はふふんと自慢げに笑うと、

「めちやめちや影が薄いから、グリーンに選んでん」

なんとということだ。ある意味、「アホ丸出しだから」選ばれた俺よりも酷くないか。困惑する俺に、ブルーが言う。

「戦隊の中で、一番影が薄いのはグリーン、その次はイエローというのが相場だ。影の薄さに比例して、弱いキャラクターでもある」
酷すぎる。グリーンの扱いが酷すぎる。

が、反論できなかつた。

一人暮らしの俺の部屋は、はつきり言って狭い。そこに俺と、長身のブルーと、影の薄いグリーン。ついでに虎猫。狭い。ただでさえ狭いのに、さらに狭い。

小さな座卓を3人と1匹で囲って座ると、ブルーがテーブルに頬杖をつき

「…狭いな」

文句言うなら帰れ。そう言いたいのをぐっとこらえて、俺はすべての元凶である虎猫を睨みつける。そんな俺を見て虎猫は首をかしげた。そして、

「ラーメン食べへんの?あ、皆に見られてたら食べにくい?」
問題はそこじゃねえんだよ。

グリーンがようやく口を開いたのは、部屋に通して1時間経ったころだった。言いにくそうにもごもごと

「き、訊きたいことがあるんですけど…いいですか…？」

と言うグリーンを見て、俺は頷いた。

今度こそ、イッパンジャーを辞めたいという相談に違いない。

「僕たち、どうして変身するんでしょうか」

ブルーほどではなかったが、俺の予想の少し斜めをグリーンの言葉が飛んでいった。俺とブルーと虎猫が首をかしげると、グリーンは小さな声で話を続ける。

「虎猫さんの話によると、僕たちは変身しても身体能力が上がるわけではないんですよ？だったらなんで、全身タイツでヘルメット姿に変身しなきゃいけないんでしょう」

「……………」

そう言われてみればそうだ。メリットもないのに、なんで変身しなきゃいけないんだろう。目を丸くした俺と、おどおどしているグリーンの顔を見比べて、ブルーは肩をすくめた。

「レンジャーだからに決まっているだろう」

当たり前みたいに言うな。

「なんや、そんなことも分からへんのか」

横で聞いていた虎猫が笑い出した。

「どういうことだよ」

「なあお前ら、よう考えてみいや。仮に変身せえへん状態で怪獣と戦うとしてやで？レンジャー5人で1体の怪獣をボコ殴りというこのリンチ映像。…変身してなかったら、お前らの素顔がばっちり残るやないか」

「…。」

「…。」

「…。」

「変身してたら、誰がやってるのは分かん。そのためのヘルメ

「ツトやないか！」

「なんでこんな犯罪のにおいがプンプンするんだこのレンジャー。」

怪獣が出現したのは、それから3日後だった。ブニブニとしている体、透けているような水色、そして玉ねぎみたいな形。やっぱりどっかで見たことある。

「そこまでだ、メンストウアー！！！」

ブルーの叫ぶこのメンストウアーに、俺は一生慣れない気がする。右手を挙げ、変身するから待ってくれと怪獣に向かっていつものように叫び、

「俺とブルーとグリーンは3人横並びで、両手をあげて左膝を曲げる。そして叫ぶ。」

「……へえ〜んしい〜ん！！！！」

やっぱり泣きたい。なんで3人横並びで、某お菓子のパッケージに描かれているおじさんのポーズをしなければならないのか。

自分の年齢を考えるとさらに泣きたい。もうすぐ20歳なのに。

変身も終わり、各々バットを手取る。ブルーがグリーンのほうを見て、静かな声で尋ねる。

「君のバットのエフェクトは？」

「僕のバットは、透明になるんです」

「なるほど。さすがは影の薄いグリーン**のバットだ**」

失礼にもほどがあるだろ。

「ちょっとやってみてくれないか？」

そう言われて、グリーンが頷く。そして、バットに向かって叫ぶ。

「スケスケ！！！！」

…バットがだんだんと透明になり、そして見えなくなった。確かに透明になった。だが待てその前に

「なんだ今の掛け声!？」

「え?エフェクトを発動させるためのキーワードですけど…」

俺のバットのエフェクトは雷で、キーワードは「サンダー」。だがこいつのは…

「スケスケってお前…」

「なんや、えつちなビデオみたいやな!！」

横で聞いていた虎猫がすかさず突っ込む。それから、こちらを見てにやりと笑う。

「とか思ってたんやろ、レッド。やらし〜」

「…んなこと、ねえよ…」

俺と虎猫のやり取りを、グリーンとブルーが無言で見ている。くくそ

「だ、黙ってないで何とか言えよブルー!！」

「…僕は虎猫の言うとおり、そういうビデオのことを想像したんだが」

お前そういうことをさりとらうか。

透明になったバットを構えて、グリーンは敵のほうへと突っ込んだ。そして、バットを振り下ろす。

が、あっさりとかわされた。

「…透明になる、と聞いた時から思っていたのだが」

それを見ていたブルーが、冷静な口調で呟く。

「飛び道具ならともかくバットの場合、透明になってもあまり意味はないな。構えている姿を見れば、バットがどの方向を向いているのかなんて簡単に分かる」

確かに。俺たちがこうして喋っている間も、グリーンの攻撃は敵にすべてかわされている。それを見て、俺はいいことを思いついた。

「だったらあの透明なバット、投げればいいじゃん」

ブルーよりも先に打開策を思いついたことが嬉しくて、俺はグリーンに向かって大声で叫んだ。

「おいグリーン！それ、投げたら当たるかもよー！！」

「…相変わらず馬鹿なレッドだ。そんなことを叫んだら、相手だつて構えるに決まってるだろう」

「…あ」

ブルーの眩きはグリーンには聞こえておらず、グリーンは透明なバットを敵に向かって放り投げた。

しかしやっぱりというか、あっさりと避けられた。

「あーあ。言わんこつちやない」

ブルーが露骨にため息をつく。く、くそ。ブルーに突っ込まれるとなんてかやたらと悔しい。

…グリーンの様子がおかしい。彼はバットを投げた後、敵の攻撃を何とか避けながら、きよるきよるとあたりを見回していた。それを見て、俺はまた大声で叫ぶ。

「おい！どうしたー！！」

「バ…」

グリーンがあたふたしながら、叫び返してくる。

「バットが見つからないんです！！」

「えー！？」

「…まあ、透明なバットを投げてしまったらな」

それを聞いたブルーが冷静に言う。

「バットのエフェクトを解除すればいいじゃん！！」

俺はそう叫んだあと、ハッとした。

そういえば、バットのエフェクトってどうやって解除するんだろ。

「な、なあ。エフェクトってどうやって解除すんの？」解除してください』ってバットに向かって叫ぶのか？」

隣にいた虎猫に訊く。すると、

「…一度エフェクトを発動させたら、その戦闘が終わるまで解除はできへんで」

ものすっごく面倒くさそうな顔で、虎猫が言った。

「…。」

「ど、どこに行っただらう僕のバット!!」

「君のせいだな、レッド」

ブルーが俺にとどめを刺した。

四つん這いになってバットを探しているグリーンに申し訳なくなくて、俺は戦闘に参加することにした。

「お前は出てこなくていいからな、ブルー!!」

俺の言葉を聞いたブルーが、やれやれと言わんばかりに両手をあげて肩をすくめた。

「当たり前だ。あんなレヴェルの低い戦闘に僕は参加しない。僕のイメージが汚れる」

なんだよおまえのイメージって。

「サンダー!!」

俺はエフェクトを発動させてから、モンスターの方に突っ込む。

そうだ、俺の必殺技をブルーに認めさせなくては。…しかし『サンダーアタック』のままではダサいと言われてしまう。…ならもつと、かつこいい技名を適当に考えてやる!

「えーっと…ス、スペシャルゴージャスクリティカルローリングサンダーアタック…」

次の瞬間、

俺は見えない何かを踏んづけてバランスを崩し、派手に転んだ。

バットを持つてるせいでうまく受け身がとれず、俺は顔面から地

面に落ちる。

「ふござっ!!」

何も無いはずのところから、金属が跳ねるような音が聞こえた。そして、

「あ、僕のバット!!」

「馬鹿だなレッド」

「アホやなレッド」

2人+1匹の声が、同時に聞こえた。

そして、それを見ていたモンスターは

「ぼ、僕は悪くないよ!!僕は悪くないよ!!」

と言いながら、どこかに行ってしまった。

「いつやー。大活躍やったなレッド!!」

右目がパンダのようになっていた俺を見ながら、虎猫が笑う。俺は右目に手を当てながら、呟いた。

「…あのヘルメット、意味があるのか?ヘルメットを被ってても、右目がこんな…」

「あのヘルメットは顔を隠すためのもんやって言ってるやんか」

頭を防御するためじゃないのかよ。

「それよりもレッド」

ブルーが真剣な顔で、

「あのお経のような必殺技、ダサイぞ」

一蹴。お経のような必殺技とは恐らく、俺が転倒する直前に叫んでいた『スペシャルゴージャスクリティカルローリングサンダーアタック』のことだろう。く、くそ。俺だって、『サンダーアタック』のほうはまだマシだと思ってたよ…!!

虎猫とブルーがどこかへ行ってしまったあと、俺は残っていたグリーンに尋ねた。

「なあお前、イッパンジャアを辞める気とかないの？」

それを聞いたグリーンは、ぶんぶんと首を振る。

「僕、今まで本当に影の薄い人生だったんです。だから、レンジャアになつたらちょっとは影も濃くなるかなって…！」

「…そうか」

眼を輝かせているグリーンに、俺はもはや何も言えなかった。

そしてやっぱり、今回の戦いを見ていた人は誰もいない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0786u/>

普通戦隊 イッパンジャー グリーン編

2011年6月14日14時40分発行